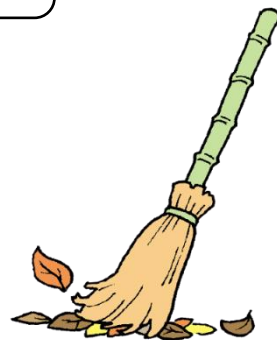
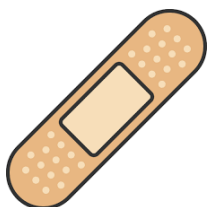


# 『だれかの笑顔のために』

## 思いやりの心

7月の梅雨の晴れ間の朝、とてもうれしいことがありました。久しぶりに晴れたので、竹ほうきで学校の西門付近を掃除していました。すると、左手の皮が少しむけてしまったのです。(軟弱な手だと少し情けなくなったので

すが) 登校してきた児童にそのことを話すと、一人の6年生の女子児童がランドセルから絆創膏を取り出し、私に渡してくれたのです。その子は、私が絆創膏を左手に貼り終わるのを見届けて、校舎に入っていました。人を思いやることができる子どもたちが育っていることを感じて、とても気持ちのよい一日のスタートになりました。



## 一人の友達のために

「思いやりの心」について考えていると、一人の生徒のことを思い出しました。私が2校目に勤務した中学校の女子生徒のことです。その生徒は耳が不自由でしたが、通常学級で生活していました。ほとんど音を聞き取ることができないために、ことばは話し手の口の形を読み取って判断していました。ですから、私たち教師は、必ず子どもたちの方を向いて授業をしていました。黒板に書きながら、黒板の方を向いて話しても、その子には伝わらないからです。しかし、その子もすべてを理解できるわけではありません。口形だけでは判断できないことばもあるのです。(例えば、「たまご」と「たばこ」の口形は同じ) そのため、学級の友達の大きな支援があったのです。教室で、隣の生徒や前に座っている生徒が、授業中いつでも支援してくれていました。文字を書いて、伝えてくれていたのです。毎日、毎時間です。

友達の支援だけでなく、本人の努力も相当なものがあったと当時も感じていました。当時、中学校から学習をはじめた英語については、発音等を聴くことは不可能でありながら、英語の成績はいつも学年のトップクラスだったのです。

音が聞こえないことで、心配なことはたくさんありました。一つは登下校です。彼女は自転車通学でしたが、後ろから近づいてくる車の音が聞こえないのです。山の上にある小さな学校でしたから、通学路も狭い道が多かったのです。音が聞こえないことで、危険を察知することができません。登下校においても、友達が前後にいて、彼女をサポートしてくれていました。

そして、彼女は中学校を卒業して普通高校に進学しました。高校での様子は、詳しくはわかりませんが、3年後、彼女が高校を卒業したというニュースが伝わってきました。卒業式の時、高校の校長先生が、彼女の3年間の努力を称えられたのだそうです。そして、もうひとつ、彼女を3年間支え続けた友達の一人を表彰されたということです。耳が不自由であるという困難を乗り越え、3年間の高校生活を全うした彼女の努力も素晴らしいが、その彼女を3年間支え続けてくれた友達がいたということを知ることができ、とても感動したのです。自分のことだけでも大変だったはずの高校の3年間。自分のことよりも友達のことを優先できる、友達の笑顔のために行動できる高校生がいたことに感動しました。

今年度、『だれかの笑顔のために』を菊水小学校のキーワードとしました。菊水小の子どもたちが、だれかの笑顔のために行動できる人に育ってほしいと願っています。

